

病院と在宅・切れ目ない備え



あわら病院で毎週金曜日に開かれる在宅医療カンファレンス＝福井県あわら市

地元で普段通りに…「後方支援」の力

国立病院機構（NHO）あわら病院（福井県あわら市）は、地域の要望に的確にこたえる在宅医療を展開し、注目されています。在宅医療へのニーズが年々増すなか、NHOでも対応を進めています。ここでは同病院の取り組みを紹介します。



あわら病院では毎週金曜日、「在宅医療カンファレンス」が開かれます。津谷寛院長＝写真＝をはじめ看護部長、内科

医長らの各部門の責任者、さらには訪問看護ステーションの看護師も出席し、在宅で受け持っている患者さんの状況や留意事項などが詳しく報告されます。情報共有を徹底するのは、地域の医療機関、関連施設などと一体となって在宅医療を行っていくためです。津谷院長は「地元の方々が住み慣れた地域で安心して暮らしていくために病院として何ができるかを検討した結果、得られた結論は在宅医療の後方支援に軸足を置くということでした」と説明します。

緊急時の受け皿

後方支援とはどういうことなのでしょうか。

地域の診療所が在宅医療を行う場合、最大

の課題は患者さんの容体が悪化したときへの対応だといわれています。診療所は入院の受け入れができないところが多く、通常、24時間対応の体制も取られていません。そこで診療所による在宅医療を地域に広めるために、あわら病院が緊急時のバックアップを引き受けたというわけです。

この地域は高齢者の割合が約3割に達するうえに、総合病院は十数[※]離れた福井市に集中しています。そのため、以前から地元に住み続けることを可能にする在宅医療が強く求められていました。あわら病院が後方支援を始めたことで、患者さんや家族は安心して在宅医療に踏み切れるようになったうえ、診療所も肉体的・精神的負担が軽減され、在宅医療を安心して行えるようになったのです。

地域で情報共有

具体的な後方支援の機能を見てみましょう。まず連携している地元の坂井地区医師会の診療所が、在宅で診ている患者さんについて、入院の必要があると判断すると、あわら病院が迅速に受け入れます。さらに、入院した患者さんに対しては、退院支援看護師が中心になって退院後の自宅での療養に向けたケアや指導を行います。患者さんが退院する際に患者さんの希望に応じ、診療所や病院の訪問診療と訪問看護ステーションの訪問看護により、サポートしていく仕組みです。



患者さんの自宅に出向く訪問看護ステーション「アイリス」の看護師

あわら病院は入院医療と在宅医療を切れ目なくつないでいるとの言い方ができます。

こうした大切な役目を負っているために

情報共有を徹底しているのです。情報共有に関しては、この地域の医療・介護関係者を結んだ「地域情報共有システム」が運用されており、特定の患者さんの体調についてネット上で問い合わせをすると閲覧した医師がリアルタイムにコメントを寄せるといった取り組みもみられます。

家族もサポート

一方、あわら病院の在宅医療関連の支援策をみると、「レスパイト入院」と呼ばれる取り組みも目を引きます。

レスパイトとは「休息」の意味です。在宅療養している患者さんを介護している家族が冠婚葬祭で家を空けたり、休息を取りたいときに、患者さんを短期的に受け入れるものです。毎月の利用や隔月の利用、1回あたり3日～2週間など利用の仕方はさまざまです。利用の理由を問うことはなく、いつでも受け入れられるようにしています。神経難病、重症心身障害児（者）医療の専門医療機関の特徴を生かし、人工呼吸器などを使用している患者さんにも対応しています。

さらに、神経難病、重症心身障害児（者）医療の豊富なノウハウを生かし、これらの病気の患者さんの在宅医療支援にも力を入れています。2015年に開設した訪問看護ステーション「アイリス」から、この病気への専門知識をもつ看護師を患者さん宅に看護に向かわせることができるためです。「アイリス」の管理者である堀野千津子さんは「患者さんからは専門知識をもつ看護師さんが来てくれるので安心しますという声をよくいただきます」と明かします。

あわら病院の在宅医療は、2004年に高齢者介護施設の嘱託医の支援を開始したことに始まり、すでに13年の実績があります。津谷院長は「医療過疎地域は在宅医療のフロンティア（最前線）です。ここでの経験や取り組みを他のNHO病院に広げていければと考えています」と話しています。